

「単数の登場人物の論理」を読む国語科授業づくり —第1学年の文学的文章を「読むこと」の実践—

中田 江美

1 はじめに

令和5年度、本校国語科研究部では、文学的文章を「読むこと」における授業実践を整理し、「論理」を切り口とした文学的文章を「読むこと」のカリキュラムデザインを行った。令和6年度は、前年度のカリキュラムを精査しつつ、より深い学びを引き出すことができる教材や実践の方法を探索することを目指した。

本稿では、第1学年の文学的文章を「読むこと」の授業実践を分析・考察することで、「論理」を切り口とした文学的文章を「読むこと」のカリキュラム（以下、『論理』を切り口とした国語科カリキュラムとする。）の妥当性を検証していきたい。

2 授業の構想

（1）単元

すきなところを見つめよう（「たぬきの糸車」、岸なみ、光村図書1年）

（2）単元デザイン

本教材は、岸なみ編「伊豆の民話」〈日本の民話4〉の「北伊豆」の中に収録されている「たぬきの糸車」を、小学校一年生向けに再話したものである。この作品では、毎晩のようにやってきて「いたずら」をすること、「くりくりした目玉」を「くるりくるり」と回しながら「糸車を回すまね」を毎晩繰り返すこと、「ぴよこんとそとにとび下り」「ぴよんぴよこおどりながら」帰っていくことなど、たぬきのかわいらしい行動が描かれている。そのため、第1学年の児童がたぬきに同化して読み進めやすい。また、原典では、「たぬきは、おかみさんのために、一年中の糸を、みんなつむいしてくれたのであります。」という文で締めくくられているが、本教材では、この一文が書かれていない。そのため、「報恩譚」に終始せず、「登場人物（たぬきとおかみさん）の心の交流」として読み広げやすくなっている。これらのことから、第1学年の児童が自分に引き付けて読むのにふさわしい教材であるといえる。

本学級の児童は、「おおきなかぶ」「サラダでげんき」の学習では、劇化を通して、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉える活動を行った。「くじらぐも」「おとうとねずみチロ」の学習では、音楽劇や音読発表会を通して、着目した場面の

様子などの叙述を基に、登場人物の行動を具体的に想像する活動を行った。どの活動においても、音読や動作化などの身体表現を工夫することで、登場人物になりきり、物語の世界に浸かる体験をすることができた。論理的に解釈する力の素地を養うために、これまでに身に付けた力を基に、文章の内容と自分の既有知識や経験とを結び付けて解釈し、想像を広げたり理解を深めたりすることができるようにする必要がある。

指導にあたっては、第0次としては、たぬきが登場する物語を教室内に置き、児童が並行読書したり、教師が学習に並行して読み聞かせを行ったりする。このことで、「たぬきと人が心を通い合わせることができる場」を教室内に設定した。第1次では、「『たぬきの糸車』の好きなところを『だあいすきカード』にまとめて、友達と読み合う。」という言語活動を設定し、学習計画を立てた。このことで、本単元の学習の見通しをもつことができるようにする。第2次では、まず、第2時に、挿絵のたぬきやおかみさんの行動や表情に着目し、それらにかかわる叙述を基に場面分けを行う。このことで、文章の内容の大体を捉えることができるようにした。そして、第3時から第8時には、「たぬきの糸車」の文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想を書く活動を行う。この学習段階において、「対象（たぬき）の論理」と「主体の論理」の往還を図る。その際、たぬきの行動に関わる叙述に着目し、音読や動作化などの身体表現を工夫することで、たぬきの行動や心情を具体的に想像し、「対象（たぬき）の論理」を読むことができるようにする。また、自分の既有知識や経験を想起し、「自分だったらどうするか」を考えることで、「主体の論理」を立ち上げることができるようにする。その後、「自分だったら～するけど、たぬきは…」と、再度、たぬきの行動や心情を想像することで、たぬきの行動や心情をより具体的に想像することができるようにする。第3次では、第2次までの学習を踏まえて、「『たぬきの糸車』の好きなところを『だあいすきカード』にまとめて、友達と読み合う」という言語活動を行う。この言語活動を通して、「主体の論理」を立ち上げ、たぬきの行動や心情を捉え直すことができるようにした。以上の指導の工夫によって、論理的に解釈する力の素地を養っていきたいと考える。

なお、本単元において扱う「『論理』を切り口とした国語科カリキュラム」の該当箇所は、次のとおりである。

学年	目標	読みの視点	単元の軸となる「対象の論理」	「主体の論理」を引き出す手立て
1	自分に引き付けて読むことができる。	「自分の視点」で読む。	単数の人物の論理 ・行動 ・心情	【判断】自分に引き付けて判断する。 ・自分だったらどうするか。 【評価】自分に引き付けて評価する。 ・作品を評価する。(すきなところ)

(3) 本単元の目標

- 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむことができる。【知識及び技能】

- たぬきの行動や心情について、具体的に想像したことと自分の既有知識や経験とを結び付けて読み、感想を書くことができる。【思考力・判断力・表現力等】
- 『たぬきの糸車』の好きなところを『だあいすきカード』にまとめて、友達と読み合う」という学習の見通しをもち、進んで文章の内容と自分の体験とを結び付けたり、読んで思ったことを友達に伝えたりしようとする。【主体的に学習に取り組む態度】

(4) 単元計画 全11時間

第0次 たぬきが登場する物語の並行読書を行ったり、読み聞かせを聴いたりする。

第1次 学習課題を確認し、学習の見通しをもつ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第2次 「たぬきの糸車」の文章の内容と自分の体験とを結び付けて読み、感想を伝え合う。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第3次 「たぬきの糸車」の好きなところを「だあいすきカード」にまとめて、友達と読み合う。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

(5) 本時の目標

- 「たぬきの糸車」の「ぴよんぴよこおどりながらかえっていくたぬき」の行動や心情について、具体的に想像したことと自分の体験とを結び付けて読み、感想を書くことができる。

(6) 本時の学習過程

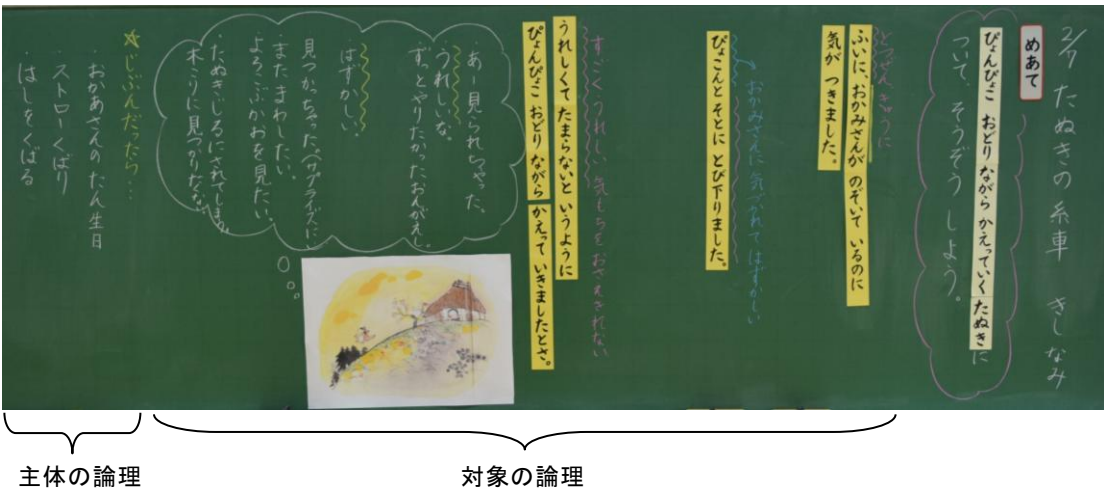
学習活動	指導上の意図と手立て	評価の観点と方法
1 前時までの学習を想起する。	○これまでの場面で想像したたぬきの行動や心情を確認する。	●前時までの学習を想起することができる。(活動の様子)
2 本時の学習課題をつかむ。		
「ぴよんぴよこ おどりながら かえっていく たぬき」について そうぞうしよう。		
3 「ぴよんぴよこおどりながらかえっていくたぬき」について、想像したことと自分の体験を結び付ながら読む。	○「ぴよこんと」や「ぴよんぴよこ」という叙述に着目して動作化を行うことで、たぬきに同化しながら、行動や心情を具体的に想像できるようにする。 ○自分の既有知識や経験を想起し、「自分だったらどうするか」を考えることで、「主体の論理」を立ち上げることができるようにする。	●文章の内容と自分の経験とを結び付けて読むことができる。(活動の様子、学習プリント)
4 「ぴよんぴよこおどりながらかえっていくたぬき」について感想を書く。	○学習活動3で読んだことを基に、「自分だったら～するけど、たぬきは…」と、再度、たぬきの行動や心情を想像して、感想を書く。このことで、たぬきの行動や心情をより具体的に想像することができるようにする。	●文章の内容と自分の経験とを結び付けて読んだことを基に、感想を書くことができる。(学習の様子・学習プリント)
5 本時の学習を振り返る。	○本時の板書や学習プリントの記述内容を確認することで、本時の振り返りを書くことができるようにする。	●本時の振り返りを書くことができる。(学習プリント)

3 授業の実際

先述した「2 授業の構想」の「(2) 単元デザイン」のとおり、第2次の第3時から第8時において、「対象の論理」と「主体の論理」の往還を図る授業づくりを行った。たぬきに同化しながら「対象の論理」を読む、そして、「自分だったらどうするか」を考えることで「主体の論理」を働かせ、再度、「対象の論理」を捉え直すという学習過程を仕組むことで、二つの「論理」の往還を目指した。

ここでは、第2次の第8時の授業を取り上げて分析を行う。「たぬきの糸車」の第五場面における「たぬきの論理」を踏まえて、たぬきの行動や心情について具体的に想像したことと自分の体験とを結び付けて読む授業である。本単元では、「たぬきの糸車」の第五場面において、おかみさんが覗いていることに気付かず、「じょうずな手つきで、糸をつむいでいるたぬき」と、おかみさんが覗いていることに気付いて、「ぴょんぴょこおどりながらかえっていくたぬき」の場面を分けて、第7時と第8時（本時）で授業を行ったことを、ここで補足しておく。

本時の板書と「対象（たぬき）の論理」は、下記の【図1】【図2】のとおりである。【図1】のとおり、板書においても、「対象の論理」と「主体の論理」を区別して示すようにした。また、【図2】の「理由付け」にあたる部分を考える際に、「自分だったらどうするか」を考えさせ、「主体の論理」が働くようにしたいと考えた。



【図1 本時（第2次・第8時）の板書】

【根拠（叙述）】

- ・ふいに、おかみさんがのぞいているのに気がついた。

【主張（心情）】

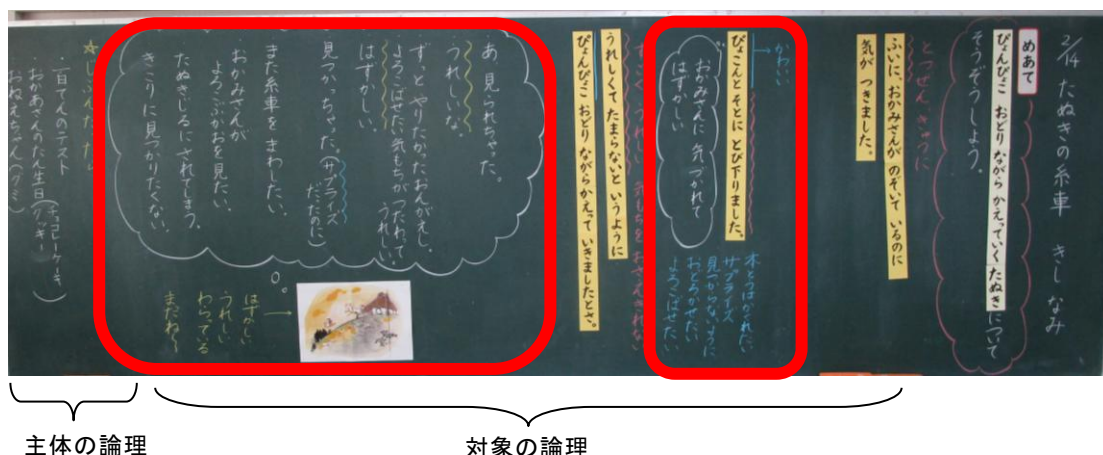
- ・うれしくてたまらないというように、ぴょんぴょこおどりながらかえっていった。

【理由づけ】

- ・自分が糸をつむいでいたことを、おかみさんに気付いてもらえてうれしい。
- ・恩返ししていたことがおかみさんにやっと伝わってよかった。

【図2 本時（第2次・第8時）における対象（たぬき）の論理】

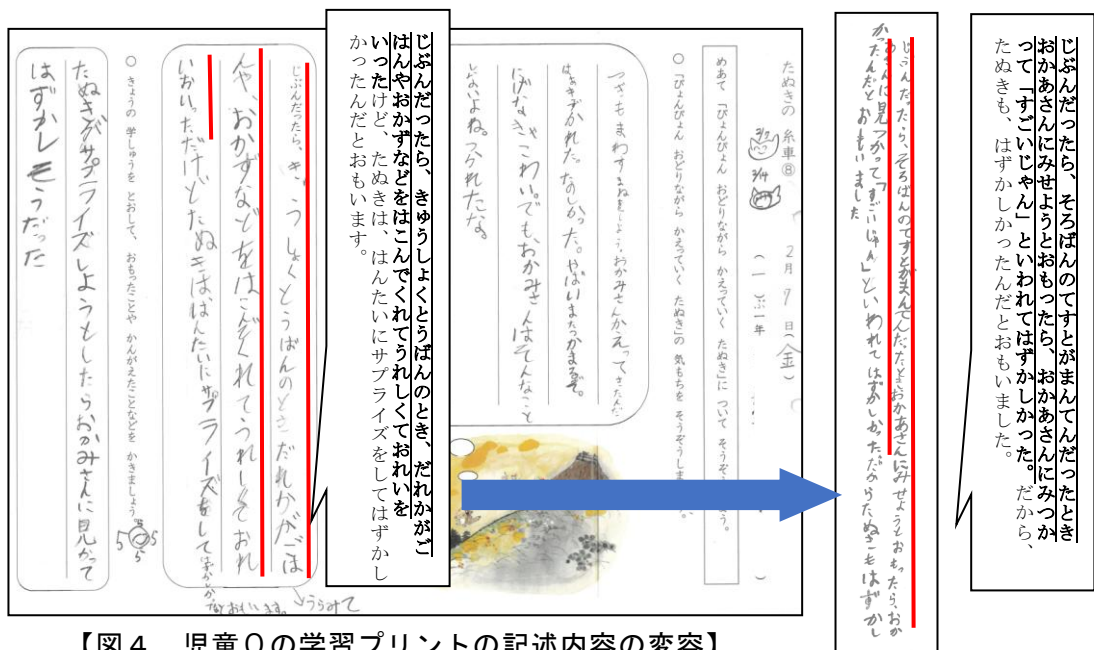
しかし、本時では、「自分だったらどうするか」を考える際に、「自分がたぬきだったらどうするか」ではなく、「自分がおかみさんだったらどうするか」という「主体の論理」を立ち上げた児童の発言を取り上げ、たぬきとおかみさんの論理を区別せずに授業を進めたため、児童が戸惑っていた。具体的には、【図1】の板書に示しているように、「自分だったら、おかあさんの誕生日にサプライズでプレゼントを準備していて、それがばれたら、嬉しいけど恥ずかしい気持ちになる。」と発言した児童は、「自分がたぬきだったらどうするか」を考えることができています。一方で、「自分だったら、給食のときストローがなくて、気付いていないときに誰かが配ってくれていたら嬉しい気持ちになる。」と発言した児童は、「自分がおかみさんだったらどうするか」を考えている。このとき、授業者は、「どうしてたぬきは嬉しくてたまらないのかな?」「どうしてずっと恩返しをしたかったのかな?」など、「対象の論理」を読む段階で児童が想像していたたぬきの心情を基にして、深く対象に迫る読みを実現させる必要があった。これらを踏まえて、次時に、たぬきとおかみさんの論理を区別し、「たぬきの論理」を捉え直した。そのときの板書が下記の【図3】である。



【図3 本時（第2次・第8時）の次時の板書】

この時間にも、上記のように、たぬきとおかみさんの論理が混在する児童の発言があった。そこで、今一度、児童に「ぴよんぴよこおどりながらかえっていくたぬき」の動作化を行い、「対象の論理」を再読させた。このことで、「恩返しがばれて恥ずかしかったのはたぬきだから、誕生日プレゼントの話はたぬきと同じ。」「恩返しが伝わって嬉しいのはたぬきだから、ストロー配りの話は（配られた方じゃなくて）配った人の気持ちがたぬきと同じ。（稿者補足）」と、たぬきとおかみさんの論理を区別して考えることができた。その後、「対象の論理」をさらに再読することで、前時と比べて、たぬきの気持ちをより深く想像することができた（【図3】の囲んだ部分）。

以上のような変容が窺える児童Oの学習プリントの記述内容は、次頁の【図4】のとおりである。



【図4 児童0の学習プリントの記述内容の変容】

このことから、第1学年の児童が、文学的文章における「単数の登場人物の論理」を読むとき、複数の登場人物の論理が内在する場合、それらの論理を混同しやすい。そのため、授業者が複数の論理を明確に区別して整理する必要があると分かった。

4 おわりに

本実践の成果と課題は、次のとおりである。

○ 成果

- ・ 第1学年の文学的文章を「読むこと」において、「対象の論理」と「主体の論理」の往還を図ることで、登場人物の行動や心情について具体的に想像したことと、自分の体験とを結び付けて読むことができると明らかにできた。
- ・ 「対象の論理」の「理由付け」にあたる部分を考える際に、「自分だったらどうするか」と自分に引き付けて判断する場面を設定することが、「主体の論理」を働かせることに有効であると分かった。

○ 課題

- ・ 第1学年の児童が、文学的文章における「単数の登場人物の論理」を読むとき、複数の登場人物の論理が内在する場合、それらの論理が混同しやすいため、授業者が複数の論理を明確に区別して整理する必要がある。その際、焦点化したい人物の行動の動作化が有効であると考えられる。

以上のことを踏まえて、今後も実践研究を重ね、文学的文章のみに留まらず、説明的文章や他の文学的文章についても、「論理」を切り口とした国語科カリキュラムの妥当性を追究していきたい。